

法崇述 『仏頂尊勝陀羅尼經教迹義記』 訳注(二)

佐々木大樹

一、はじめに

本論では、前号に引き続き、法崇撰『仏頂尊勝陀羅尼經教迹義記』（大正藏一八〇三番、法崇疏）について訳注を行う。前号では、『仏頂尊勝陀羅尼經』の十門分別のうち第九まで終わったので、今号では「第十依文判釈」から再開し、【①教起因縁分―一、証信序―一、信成就】を取り上げたい（※前号論末のシノプシス表参照）。

法崇疏では、信成就すなわち經典冒頭の「如是」についての注釈に力を入れており、その文量はおよそ疏全体の十分の一に及ぶ。その内容は、『大智度論』や窺基（六三二～六八二）等の諸注釈に依るところが大きいが、純粹な引用というよりは取意文が多く、時に異なる教説をつなぎ合わせて、一連の話とする傾向が読み取れる。

六成就文についての、『大智度論』からの長めの取意引用文では、釈尊入滅後の三蔵編纂の結集に続いて、大迦葉による弥勒信仰ともいうべき話が取り上げられている。すなわち結集を成し遂げた大迦葉が入涅槃に際し、将来、弥勒仏にまみえることを願つて、耆闍崛山（靈鷲山）の土中に入り、その到来を待つたと記されている。この大迦葉の話は、幾種かの弥勒經典に説かれるものであるが、弘法大師空海（七七四～八三五）の入定説話と類似しており、不空周辺で成立したと目される法崇疏に同話が取り上げられた事実は興味深い。

また、前号では、中国で作られた疑偽經典『提謂波利經』が多用される傾向を指摘したが、今号の範囲では、中国で作られた偽書『周書異記』より、穆王（紀元前一〇世紀頃）と釈尊の生存年代を同一視する説が引用されている。このように法崇疏は、正統な経論のみならず、民間で流布した傍系の典籍もまた用いるところに、一つの特徴があるといえよう。

法崇撰『仏頂尊勝陀羅尼經教迹義記』 訳注

（高基本・上巻二〇丁右、¹『正統藏經』三二七卷一八四丁左・下段、²『大正藏』三九卷二〇一四頁下段）

※亮汰注（上巻・四丁右）の以降は抄訳であり、他本と異なるため、丁数等を割愛する。

第十に文に依りて判釈す。

経に曰く、「如是」とは、述して曰く、此の経の一部分を三分と為す。先に三分を明かし、後に二序

を明かす。三分と言うは、一に教起因縁分、二に聖教所説分、三に依教奉行分なり。經の「**如是我聞**」より下「**具如上説**」に至るは、是れ教起因縁(記續藏本 一八五右)分なり。「**爾時如来**」より下「**俱来見我**」に至るは、是れ聖教所説分なり。(高基本・上 卷一〇丁左)「**爾時天帝**」より下「**信受奉行**」に至るは、是れ依教奉行分なり。

夫れ聖人の説法、必ず叙する所有り。所化の俗流、須く耳を驚かすべし。率爾に而も説くは、敬情を起さず。故に經に先づ教起因縁分を標す。既に淨心にて信仰せば、即ち宗を開きて法を受く。次に聖教所説分を明かす。群生寂ならず、大悲限り無し。是を以て伝え訓しえるが故に依教奉行分と言う。

前の第一教起因縁分中に就き、復た分かちて二と為す。一に証信序、二に發起序なり。「**如是我聞**」より已下「**与大菩薩僧万二千人俱**」に至るは、是れ証信序なり。「**爾時三十三天**」より已下「**至具如上説**」は、是れ發起序なり。先に証信序を明かし、後に發起序を明かす。

【① 教起因縁分 一、証信序】

証信序と言うは、六句の經文有り。一に信、二に聞、三に時、四に主、五に処、六に衆なり。六義、若し円なれば、即ち能く証信す。(高基本・上 卷一二丁右)六義、足らざれば、証成すること能はず。爰を以て天親論の偈に云く、「前の三は弟子を明かし、後の三は師説を証す。一切の修多羅法門、⁴皆な是の如し⁵」と。

【①——— 信成就】 信成就の中に就き、復た分かちて三と為さば、一には有の所由を明かし、二

には六成就を顕すを明かし、三には正しく其の信を解す。

第一に有の所由を明かすとは、「周の穆王^{ぼくわう}、五十二年壬申の歳、二月十五日平旦、忽然として黒風暴起し、日、精光する無く、屋を発き樹を折り、大地震動す。齋已^{（大正藏本一〇二五）}後を過ぎ、天下の大暗、西方より白光十二道有りて、左右通徹す。穆王、大史扈多^{こた}に問うて曰く、『此れは是れ何の祥ぞや』と。扈多、対えて曰く、『西方に大聖人有り、將に滅度を欲せんとす。故に此の相を現す。此の時に当たれり』⁷と、是れ有り。如来世尊、涅槃に入らんと欲うの日、阿難、仏の涅槃に入らんと欲うを見て、其の心憂惱し、悲涕流^{（高基本・上巻一丁左）}涙すること、父母を喪うが時の如し。長老、滅無く、阿難に語りて曰く、「豈に凡夫、其の憂惱有るに同ずるをや。当に如来に四種の大事を問うべし」と。此れ即ち第一に有の所由なり。

第二に六成就¹⁰を顕すとは、其れ三種有り。一に疑を断ぜんが為に、二に信を生ぜんが為に、三に謗を止めんが為なり。

第一に疑を断ずとは、『大智度論』に云く、「如来世尊、二月十五日に於て、娑羅双樹の間にして涅槃に入りたまう。爾の時に諸天、將に法の滅せんことを恐れ、迦葉の所に往きて摩訶迦葉¹¹を頂礼す。是を以て偈を説きて言く、『耆年^{ぎねん}、慾・恚・慢を已に除き、其の形は譬へば紫金柱¹³の如し。上下端巖にして妙なること無比なり。目は明にして清浄なること蓮華の如し』と。爾の時に諸天、偈を説きて讚

じ已り、迦葉に白して言く、『大徳よ、法船、將に没せんとす。法城、將に頽れなんとす。法海、將に竭きなんとす。法幢、將に倒れんとす。法灯、將に滅せんとす』と。

爾の時に大迦葉、諸天に報えて言く、『世間無常にして(高基本・上 卷二二右) 久しからず、盲冥なり』と。默然として請を受く。爾の時に天等、迦葉を礼し已りて、各々天宮に還る。

爾の時に大迦葉、即ち自ら思惟すらく、『我れ当に能く仏恩に報ずべし。故に一切天人の為に法蔵を結集せん』と。即便ち身、虚空に昇り、須弥山頂に住し、鐘を撃ち、鉦を擡げて、偈を説きて言く、『仏の諸の弟子よ、若し仏を念わば、當に仏恩に報ずべし。涅槃に入ること莫れ』と。當に此の捷鉦(けんついで)の聲、及び迦葉の語を伝えて、一時に普く(注統藏本 一八五左) 三千世界に遍すべし。是れ仏弟子、能く悉く我語を聞きて、阿羅漢を得たる者、一時に大迦葉の所に來集す。爾の時に大迦葉、大衆に告げて言く、『仏、將に滅せんとせられ、法、今將に滅せんと欲す。共に結集すべし。結集し已訖らば涅槃に随わん』と。

時に大迦葉、王舎城に至り、千人を選び得たる。唯だ阿難のみ未だ羅漢を得ざるを除き、余の者は九百九十九人、皆な是れ羅漢なり。『問う、何(なん)れぞ、只だ千人を取りて(高基本・上 卷二二左) 多ならずや、少ならずや』と。『答う、頻婆娑羅王は、阿闍世王の父なり。願を發して毎日千僧を供養す。乃至、其の子阿闍世王も亦た父の法に準ず。』

時に大迦葉、王舎城に至り已て、阿闍世王に告げて言く、『我れ今、法蔵を結集せんと欲す。王、供を辦ずべし』と。是の時に迦葉、一千人と俱(ぎ)に耆闍崛山(ぎやくつせん)に往き、夏三月安居す。初の十五日に説戒し

訖る時、大迦葉、即便ち定に入り、衆中にて誰か煩惱有りて応に逐出すべき者を観するに、唯だ阿難のみ有り。余の者は是れ羅漢なり。

時に大迦葉、手を以て阿難を牽き、衆より出して之を語りて曰く、『此れは是れ清淨の衆をもて三蔵を結集す。汝は結¹⁹、未だ尽きず。応に此に住すべからず』と。

爾の時に阿難、慚恥し、自ら念じて云く、『我れ世尊に仕えて二十五年、是の如き苦惱を生ずることに会わず。實に是れ大慈もて含忍したまう』と。迦葉に白して言く、『我れ供養を為さんが故なり。』(高基本・上 卷三十三右)故に残結²⁰を留めり』と。迦葉の曰く、『汝に更に六種の応に懺すべき突吉羅²¹有り。懺悔せよ。一は女人を度せんと出家を請う。』²²我が正法の滅すること五百年なり。二は仏住を請わす。』²³三は仏に水を与えす。』²⁴四は鬱多羅僧²⁵を疊ね臥す。五は仏の僧伽梨衣を踏む。六は仏の陰藏²⁶を以て女人に視す。』²⁷此の六罪有り、汝、応に懺悔すべし』と。

阿難、答えて曰く、『我れ、過去・未來世の仏は皆な四種の所以有るを聞き、女人を放ちて出家することを請う。第二に仏の住世を請わざることは、為く魔、我が心を蔽うが故なり。第三に仏に水を与えざるは、上流の処に五百乗の車過ぐるごと有りて、其の水混濁するが為に、仏に水を与うるに堪えず。第四に鬱多羅僧を疊ね臥すは、身痛を患うが為の故なり。第五の仏の僧伽梨衣を畳み、足を以て上を踏むは、風吹きて錯りて足下に入る為なり。第六の仏の陰藏を以て女人に視すは、』(高基本・上 卷三十三左)女人をして厭を生ぜしむるなり』と。

阿難、即ち衆中に於て革履を脱ぎ、偏に右肩を袒はだぬき、長跪合掌して突吉羅罪の懺悔を作す。懺悔、已に訖りて、大迦葉、即ち僧中に於て手を以て阿難を牽き出でて、之を告げて曰く、『汝、若し残結の未だ尽くさずんば、復た來ること勿れ』と。

即便ち門を閉じ、諸の羅漢を將ひきいて共に相あい謂いて言いく、『誰か能ひく毘尼法藏びにほふを結集けつじつするや』と。時に阿泥楼豆あぬるだの言いく、『舍利弗しゃりふの弟子・橋梵婆提きやうぼんは、善よく毘尼を解とす。今、天上の尸利沙園しりしやおんに在りて毘尼を説いく』と。

爾の時に大迦葉、羅漢を差つかわして忉利天とうりてんに往ゆかしむ。僧使と為るが故に、雁の迅く飛ぶが如し。往きて天上の橋梵婆提の所に到り、頭面に足を礼して問訊起居し、白して言いく、『大徳よ、南閻浮提なんえんぷだいに今、僧事有り。疾速く往くべし』と。橋梵婆提の曰いく、『僧、鬪諍せざるや。仏日、滅度するや。和合僧破すや』³⁴と。比丘、答えて曰いく、『仏、已いに(高基本・上 卷一四丁右)滅度せり』と。橋梵婆提の云いく、『仏の滅、太だ疾はやし。世間の眼、滅せり』と。

又、問いう、『我が和(正統藏本 一八六右)尚の舍利弗、在すや不いや』と。答えて曰いく、『已に涅槃に入れり』と。又、問いう、『摩訶目連まかくれん、在すや不いや』と。答えて曰いく、『亦た涅槃に入れり』と。爾の時に橋梵婆提、比丘に報えて言いく、『我れ今、既に離欲の大師を失し、和尚、復た滅せり。更に往きて何をか為さん。我れ今、重ねて閻浮提に下ること能はず。此処に於て般涅槃はんねはんに入るべし』と。是の語を作し已りて即便ち定に入り、踊り上りて虚空に処し、十八變じゅうはちへんを現まず。神變を現じ已りて、心より化出するに、火を以て身を

焼き、火中に水を出だす。³⁷ 水、四道に分かちて流れ下りて、大迦葉の三蔵を結集する処に至る。水中に声有り、偈を説きて言く、『憍梵婆提、頭面もて諸衆第一の大徳僧に礼したてまつる。仏の滅度を聞きて、我れも随い去らん。大象、去れば、象の子も随い去るが如し』と。

爾の時に下座の比丘、閻浮提の耆闍崛山中の(高基本・上 卷二四丁左)法蔵を結集する処に還るに、阿難の果を明かさん。爾の時に阿難、即ち当に羅漢を証得するに於て、即ち堂門をたた敲く。大迦葉、問うて曰く、『門を敲く者、是れ誰ぞ』と。阿難、答えて曰く、『我れは是れ阿難なり』と。迦葉、問うて曰く、『汝、何なんす為れぞ来たるや』と。阿難、復た答えて曰く、『我れ已に羅漢を証せり』と。迦葉、報えて曰く、『汝、既に羅漢を証さば、意に随いて入り来たれ』と。阿難、既に入るに、迦葉、阿難をして高座に昇らしむ。座に昇りて已後、如来の三十二相・八十種好を修む。³⁸

爾の時に阿難、一心に合掌して仏の入涅槃の処に向かい、偈を説きて言く、『仏、初めて法を説きたまいし時、爾の時に我れ見ずして展転して聞けり。仏、波羅奈はらなに在して、仏は五比丘の為に初めて甘露の門を開き、四真諦の法、苦集滅道を説きたまう。阿若憍陳如あにやきょうしんによは見道を得、⁴¹及び八万の諸天も是れを聞きて見道を得』と。

爾の時に阿難、此の偈を説き已る時、千の羅漢、皆な言く、『無常の力は(高基本・上 卷一五丁右)大なり。我等、眼のあたり仏を見ん』と。同声に偈を説く、『我れ仏の身相を見ること、猶し紫金山42の如し。妙相・衆徳滅して唯だ名のみ独り存すること有り。是の故に当に方便して来たりて三界を出づるべし。諸の善

根を勤集するに、涅槃は最も楽と為す、是れなり』と。千の羅漢、此の偈を説き已りて、遂に本座に復す。

時に大迦葉、優婆離うぱりに対して先づ五部の律藏りつざうを集め、次いで阿難に対して素怛覽藏そたらんざう・阿毘達磨あびだまの二(大正藏本 二〇二六)藏ざうを集む。信まことに如来の初転法輪、乃至、般涅槃の四阿含しあかんを集む。一には増一阿含、二に長阿含、三に中阿含、四に相應阿含なり。総じて修多羅藏しゆたらざうと名づく』と。⁴⁶

「爾の時に大迦葉、法藏を結集し已訖りて、方に耆闍崛山の諸の弟子に告げて曰く、『今日の晡時、是れ吾が涅槃に入る時なり』と。諸の弟子、一時に山を下り、王舎城の一切貴人に告げて曰く、『摩訶迦葉、今日の晡時に涅槃(高基本・上 卷一五下)に入らん』と。爾の時に一切人民、各おの愁惱を懐き、一時に大迦葉の所に至る。迦葉、為に種々の法要を説き、即便ち仏より属せらる僧伽梨衣を著け、衣鉢を執持して手に錫杖を提げ、金翅鳥こんじちようの如く、身を空中に踴おどらせて十八變を現す。神變を現じ已りて、便ち願いて言く、『願くは我が此の身、弥勒に見えることを得たまえ』と。発願し已訖りて、直ちに耆闍崛山中の中に入る事、軟泥に入るが如し。入り已りて還ふたび合し、住して弥勒を待つ。

人寿八万歳、身長八十尺に至るに、弥勒仏の出世有り。長一百六十尺、面広二十四尺、円光十里なり。三会さんかいに人を度し、(中統藏本 一八六左)人民の懈怠なるに説法したまう。

爾の時に弥勒仏、即ち足の指を以て耆闍崛山に案ずるに、即ち為に山を開く。開き已訖る時に大迦葉、僧伽梨衣そうがらゐを著きけ出でて弥勒を礼拝し、虚空に上昇して十八變を現す。神變を現じ已りて涅槃に入る。

爾の(高基本・上 卷二六丁右)時に当たり、無数の衆を度したまう」と。此れ即ち第一の疑を断ずるなり。

第二に信を生ずとは、大地の能く草木を生ずるが如し。信は、父母の能く男女を資養するが如し。若し仏宝、則ち法身を資長せば、此れ則ち第二の信を生ずるなり。

外道の經書の如きは、則ち是の如き六義54無し、所以に誹謗を被る。55

第三に正しく其の信を解して、「如是(是の如く)」57と云うは、真俗、齋ひとしく通じ、理事、双べて挙げ、師資、並びに称す。凡聖、同じく歸し、十地、纔に欠望56すべし。三乗、其の本を知ること莫し。又、『注法華』に云く、「如是とは感応の瑞なり」と。所以に『大宝經58』に云く、如来、凡そ常の說法、先づ三種の大吉祥の瑞を現じたまう。一に梵音を為し、二に妙香を為し、三に光明を為したまう。此の三種を現じ、變じて宝臺を成じ、遍く十方に至り、普く世界を動じたまう。衆生の見る者、身毛皆な豎ち、勝心品59を發す。能く衆生の煩惱をして崩落せしむ。毘湿葉60を毒藥の中に置くが如し、(高基本・上 卷二六丁左)彼の毒藥をして變じて甘露を成ぜしむ。是の如きの吉祥の妙藥、八万四千の塵勞中に置かば、變じて真如の甘露を成ず。所以、是の如し。

吉祥の瑞に略して十喻有りて如是と説く。一に積薪の論、二に師子の筋の論、三に転輪王の論、四に宝精の論、五に檀香の論、六に賓伽羅びんがらの論、七に耆婆ぢばの鼓の論、八に師子の乳の論、九に功德の瓶の論、十に水精珠の論なり。

第一に積薪焼尽す。二に師子の筋もて琴弦と作す。三に輪を以て降伏す。四に宝精の論とは光明なり。五に檀香の論とは、伊蘭林いらんの方四十里を撰す。⁶²六に賓伽羅びんがらの論とは、『優婆塞戒經』に曰く、迦陵かりやう国の中に七宝蔵有り。名づけて賓伽羅と曰う、七宝を具足す。衆生、之を取るも尽きること無しと。⁶³信も亦た是の如く、一切諸仏の法宝を生ぜん。七に耆婆の鼓の論とは、(高基本・上 卷一七丁右)『明了論』⁶⁴に云うが如し。耆婆の鼓、但だ一切衆生に有りて軍陣の中に入り、諸の毒箭に遇う。枚を以て鼓を撃つに、所有の毒箭、一時に皆な出でて諸の苦痛無し。信も亦た是の如く、信心も一たび発せば、能く三毒の箭をして一時に即ち出ださん。八に師子の乳の論とは、『華嚴經』に曰く、師子の乳の如きは、諸の乳中に投ずるに、悉く化して水と為らんと。⁶⁵信も亦た是の如く、能く化して一切の煩惱、變じて法水の法湛たる菩提と為らん。九に功德の瓶の論とは、『智度論』に云く、婆羅門有り。十二年中に於て功德天に事え、以て如意を求む。十二年満じて、功德天、現じて一瓶を授与して云く、「汝、須もとむる所は、此の瓶より索めば、即ち如意を得んと。⁶⁶信も亦た是の如く、能く一切の諸善功德を生ぜん。十の水精の論とは、『唯識論』に云く、諸の濁水有り。以て此の珠を置かば、威力のゆえに水即ち清浄なることを得んと。⁶⁷信も亦た是の如く、(高基本・上 卷一七丁左)能く不信の混濁をして悉く清浄なることを得しむ。

又、真諦三蔵68の云く、「如是とは、諸の謗を離るが故に名づけて如是と為す。謗に五種有り。一に増益の謗、二に損減の謗、三に相違の謗、四に愚癡の謗、五に戲論の謗なり。言く、此の経の因果(山統藏本 一八七右)、決定して実まことに有なりと、是れ増益の謗なり。言く、此の経の因果、実まことに無なりと、是れ損減の謗なり。

言く、此の経の因果、亦有亦無と、相違の謗なり。言く、此の経の因果、非有非無と、愚癡の謗なり。言く、此の経の因果、非非有非非無と、戯論の謗なり。言く、五の謗を離るが故に如是と名づく」と。⁶⁹

又、『仏地論』に云く、「如是とは、四義釈に依らば、第一に譬論の釈、第二に教誨の釈、第三に問答の釈、第四に許可の釈なり。第一に譬論の釈とは、汝、今の福貴、毘沙門の如し。第二に教誨の釈とは、汝、当に是の如く読誦し、是の如く修行すべし。第三に問答の釈とは、(高基本・上 卷一八丁右)是の如く我れ聞き、是の如く宣説すべし。第四に許可の釈とは、我れ当に汝が為に是の如く宣説すべし」と。⁷¹

(苑法注・上卷 科註 四丁左)梁武帝の云く、「斯の如きの言は、是れ仏の所説なり。故に如是と言ふ」と。又、静泰法師の云く、「如は即ち法を指す。是は即ち辞を定む」と。⁷⁵法の如く説く所は、一切皆な是の故に如是と言ふ。又、肇法師の解に云く、「信は即ち言う所の理に順ず。順ずれば即ち師資の道を成ず」と。⁷⁷故に経の初に在り。建てて如是と言ふ。今、解すらく、如は三世諸仏の言の如し、是とは即ち三世諸仏の所説なり。故に如是と言ふ。

又、梁朝の『撰論』に「信に三種有り。一に実有を信ず。二に得べき有りと信ず。三に無窮の功德有りと信ず」と。⁷⁸譬えば木中に定んで火性有りて、之を鑽るに火を得るが如く、種種の功用有ることを得。仏性も亦た爾なり。

今は略して十の釈と為す。一には聖位に入るの初因、凡籠より出づるの漸果なり。二には法味を食するの嘉首、(高基本・上 卷二八丁左)法宝を荷うの両肩なり。⁸⁰三には七財を獲るの原首、王力を得るの初心なり。四

には三乗の依止する所、万行、此に因て修む。五には心水を湛えるの清珠、意性の課濁を朗かす。六には淤泥の中より出づ。七には生死の險路を超ゆ。八には苦海に沈むの舟船なり。九には法宝を採るの手足なり。十には曠野に遊ぶの甲伏なり。

所以に『唯識論』に、善の十一の中、其れ三段有り⁸¹。一に有の所由、二に六の中、信を解し、三に疑を断じて信を生じるなり。謗を止むるに淨信を以て体と為す。水精珠の能く濁水を清むるが如し。上來、三種の不同有りと雖も、総じて第一の信成就を明かし竟んぬ。

注

1 弥勒に関わる大迦葉の入定説話は、鳩摩羅什訳『弥勒下生成仏経』(『大正蔵経』一四卷四二五頁下段)、同『弥勒大成仏経』(『大正蔵経』一四卷四三三頁下段)に記載される。『大智度論』を含め、いずれも鳩摩羅什訳という点が注目される。なお、当説話について、阿部貴子先生より諸々ご教示いただいたので、御礼申し上げたい。

2 大正蔵本では、経本文のみを最初に掲げるが、高基本では、常に経本文に先立ち「経曰」を付す。本論では以下、高基本にしたがって「経曰」を付することとした。

3 天親とは、瑜伽行唯識を大成した世親 (Vasubandhu : 一説に四〇〇〜四八〇頃) のこと。

4 修多羅とは、梵語 sūtra (糸の意) の音写語で、仏の説かれた経典を指す。

5 世親著作中に同文は見当たらないが、吉蔵撰『法華義疏』(『大正蔵経』三四卷四五四頁上段) や円測撰『仁王経疏』(同三三卷三六二頁中段) に、世親の灯論として同一の文が説かれる。

6 穆王とは、紀元前一〇世紀頃、周朝の第五代の王である。

7 周朝第五代の王・穆王（紀元前一〇世紀頃）と釈尊の生存年代は全く一致しないが、これを一致させて説くのが『周書異記』である。『周書異記』の性格や成立背景等については、楠山春樹「中国仏教における釈迦生滅の年代」（一九八五年、『仏教思想の諸問題——平川彰博士古稀記念論集』所収）、三輪是法『周書異記』について」（一九九七年、『日蓮教学の諸問題——浅井円道古稀記念論文集』所収）を参照した。

本書は、仏教と道教の対立の中、中国で捏造された偽書であり、釈尊よりも老子を先行させる『老子化胡経』に対する仏教側の反駁書として成立したものであるという。『周書異記』の本文は、法琳『破邪論』（大正蔵二二〇九番）に引用されるもので全てであるとされる。本書に示された釈尊の生滅年代の説は、中国において通説的に浸透し、他方、日本にも奈良期に伝わって大きな影響を与え、特に末法の年代を規定する上で依用されたという。

法琳『破邪論』に引用される『周書異記』を参考までに挙げる。次の通りである。

「穆王五十二年壬申歳二月十五日平旦。暴風忽起發損人舍傷折樹木。山川大地皆悉震動。午後天陰雲黑。西方有白虹十二道。南北通過連夜不滅。穆王問太史扈多曰。是何徵也。扈多對曰。西方有聖人滅度。袁相現耳。穆王大悅曰。朕常懼於彼。今將滅度。朕何憂也。當此之時。仏入涅槃也」（『大正蔵経』五二卷四七八頁中段）

8 阿難とは、梵語 Ananda（阿難陀）の音写語。釈尊の十大弟子の一人で多聞第一とされた。

9 四種大事については、他経論に用例がなく、また文脈上の情報も乏しいことから、その特定は困難である。小乘涅槃経に分類される法顯訳『大般涅槃経』（大正蔵七番）等では、諸衆が悲嘆する中、釈尊によつて戒・定・慧・解脱の「四法」が説かれている。そこでは、この四法を知らなければ、速やかに無上なる覺りを得られないとして、みな精進して四法を修習すべきことを勧めており、四種大事に相当するものとも考えられる（『大正蔵経』一卷一九五頁中段）。

10 經典の序文に具備される①聞成就、②信成就、③時成就、④教主成就、⑤住処成就、⑥衆成就の六種をいう。

11 摩訶迦葉とは、梵語 Mahākāśyapa の音写語。釈尊の十大弟子の一人で頭陀第一とされた。

12 耆年とは、年老いること、また老人をいう。ここでは摩訶迦葉を指す。

- 13 紫金柱とは、紫色を帯びた最上級の金でできた柱をいう。
- 14 盲冥とは、智慧がなく、真実にくらいこと。迷いの闇。
- 15 鍵錠とは、梵語 *śaṅṅīṭā* の音写語で、衆人を参集するための木製の鳴り物。
- 16 頻婆娑羅王とは、梵語 *Bimbisara* の音写語。マガダ国王で深く仏教に帰依し、釈尊に竹林精舎を寄進したことで知られる。
- 17 阿闍世王とは、梵語 *Ajātasattu* の音写語。頻婆娑羅王と韋提希 (*Vaiḍehī*) の間の子で、王位に就くために父王を幽閉する等も行つたが、後に仏教に帰依し、教団を外護したとされる。
- 18 耆闍崛山とは、梵語 *Grīdhraṅkūṭa* の音写語で、靈鷲山とも呼ばれる。王舎城 (*Rājagṛha*) の東方にある聖山で、『法華経』『般若経』『観無量寿経』等の主要な大乘經典の説処として知られる。
- 19 結とは、煩惱の束縛であり、衆生を生死に繫縛する。
- 20 残結とは、煩惱を尽くさず残すこと。『大智度論』では、阿羅漢になると釈尊の供養給仕ができなくなるため、あえて煩惱を尽くさなかつたと阿難は述懐している。
- 21 突吉羅とは、梵語 *duṣkṛta* の音写語で、懺悔すれば消える程度の軽微な悪罪を意味する。以下、大迦葉は阿難の突吉羅罪として六種を挙げ、阿難はそれぞれ理由を挙げて弁解している。
- 22 シヤカ族の子女が出家を申し出た時、釈尊は拒否したが、その後、阿難のとりなしによつて出家が許され、比丘尼が誕生したとされる。
- 23 釈尊が世に留まり続けるべきかを問うた時、阿難は悪魔に憑りつかれて、再三にわたり答えなかつたという。その結果、釈尊は、悪魔に促される形で一劫におよぶ寿命を捨て、三日月後に涅槃に入ることを決意したとされる。
- 24 釈尊がクシナガラで臥している時に水を求めたが、阿難は水を与えなかつたとされる。阿難は、直前に五百の車が川を渡つて、水が濁っていたことを理由として挙げています。
- 25 鬱多羅僧とは、梵語 *uttarasanga* の音写語で、比丘が所有する三衣のうち、礼拝・聴講・布薩等で用いられた上衣 (七条衣)

- を指す。ここでは突吉羅罪として、釈尊の鬱多羅僧を四つに畳んで地に敷いたことを挙げているが、『大智度論』では、水を与えなかった事跡とあわせて突吉羅罪に挙げている（『大正藏經』一五卷六八頁上段）。
- 26 僧伽梨衣とは、梵語 *saṅghāṭi* の音写語で、比丘が所有する三衣のうち、正装にあたる大衣（重衣、九条衣）を指す。阿難が風によって身がよろけ、僧伽梨衣を踏んだことを突吉羅罪として挙げている。
- 27 陰藏とは、仏の三十二相の一つ「陰馬藏相」の略称。釈尊の男根は腹中に藏されて、馬の陰部のように外から見えないとされた。ここでは突吉羅罪として、釈尊の入涅槃後、阿難が釈尊の陰馬藏相を女人に示したことを挙げている。
- 28 毘尼とは、梵語 *vinaya* の音写語で、教団の規則・規律の集成のことをいう。
- 29 阿泥楼豆とは、梵語 *Aniruddha* の音写語。釈尊の十大弟子の一人で天眼第一とされた。
- 30 舍利弗とは、梵語 *Sariputra* の音写語。釈尊の十大弟子の一人で智慧第一とされた。釈尊の有力な弟子であつたが早逝したとされる。
- 31 橋梵婆提とは、梵語 *Gavampati* の音写語。舍利弗の弟子であり、解律第一と称された。
- 32 尸利沙とは、梵語 *śiśā* の音写語で、吉祥を意味する樹木とされる。尸利沙園とは、このシリーシャ樹が茂る園林であり、切利天（三十三天）にあるとされる。
- 33 閻浮提とは、梵語 *Jambudvīpa* の音写語で、須弥山の南方にある大陸とされる。
- 34 破和合僧（破僧）とは、本来和合すべき教団を破壊、分裂させることをいう。
- 35 摩訶目連とは、梵語 *Maudgalyāyana* の音写語。釈尊の十大弟子の一人で神通第一とされた。舍利弗の朋友であり、舍利弗とともに釈尊の二大弟子とされたが、釈尊よりも先に早逝した。
- 36 十八變とは、阿羅漢が涅槃に入る時に現す十八種の神変をいう。すなわち、振動・熾然・流布・示現・転変・往来・卷・舒・衆像入身・同類往趣・顯・隱・所作自在・制他神通・能施弁才・能施憶念・能施安樂・放大光明である。
- 37 身体の上部から火を出し、下部から水を出すことを双神変という。

- 38 『大智度論』の対応箇所では、摩訶迦葉により阿羅漢になったことを認められた阿難は、阿泥楼豆 (Anuruddha) により經藏の結集者に推挙され、師子床に坐したと記されている(『大正藏經』二五卷六九頁上段)。
- 39 波羅奈とは、梵語 Varanasi の音写語で、ガンジス河沿いにあった商業を中心とする都市国家。同地の東北に、釈尊の初転法輪の地であるサールナートが位置する。
- 40 阿若憍陳如とは、梵語 Ārāṭa-Kaundinya の音写語で、五比丘の一人。釈尊が初めて五比丘に対して説法(初転法輪)を行った時、最初に化度されたと伝えられる。
- 41 見道とは、四諦の法をよく観察する段階であり、聖者の道の最初とされる。
- 42 紫金山とは、紫色を帯びた最上級の金でできた山のことであり、仏身に譬える。
- 43 優婆塞とは、梵語 Upari の音写語。釈尊の十大弟子の一人で持律第一とされた。
- 44 律藏とは、釈尊が説かれた教団の規則・規律の集成である。
- 45 素怛覽(修多羅)とは、梵語 sūtra の音写語で、釈尊が説かれた教法の集成である。
- 46 阿毘達磨とは、梵語 abhidharma の音写語。釈尊が説かれた経・律に関する研究・注釈の集成であり、論藏と呼ばれる。
- 47 阿含とは、梵語 aṅgana の音写語で、伝承された釈尊の教説を指す。教説の長短等によって長阿含・中阿含・雜阿含(相應阿含)・増一阿含の四種に分類される。
- 48 龍樹造・鳩摩羅什訳『大智度論』(『大正藏經』二五卷六七頁中段〜六九頁下段)の取意引用。法宗疏では、以下、三藏編纂後の事跡として大迦葉の入涅槃、さらに弥勒仏の出世等が説かれるが、これは『大智度論』の別箇所からの取意引用である。
- 49 晡時とは夕方の頃合いのこと。
- 50 金翅鳥とは、インド神話に登場するガルダ (Garuda) という神鳥。
- 51 弥勒は、五十六億七千万年の後に下生し、龍華樹の下で三会の説法を行うとされる(龍華三会)。引用元である『大智度論』

では、初会で九十九億人、第二会で九十六億人、第三会で九十三億人が阿羅漢果を得たと詳細が示されている。

52 大正藏本には「者」とあるが、高基本および卍統藏本は「著」であり、後者を採用した。

53 龍樹造・鳩摩羅什訳『大智度論』（『大正藏經』二五卷七八頁中段〜七九頁上段）の取意引用。

54 六義とは、仏説の証となる信・聞・時・主・処・衆の六成就のことである。外道の書とは異なり、仏經には必ず六成就文が具わるから誹謗を被らないとしている。

55 六成就を顕す三義のうち、第三の「謗を止めんが為」に呼応する一文である。

56 欠望とは、こいねがうの意である。「如是」の語によって、凡夫も聖人もともに帰依し、十地という高位の菩薩もこいねがうとしている。

57 窺基撰『妙法蓮華經玄贊』（『大正藏經』三四卷六六三頁上段）。

58 『大宝積經』に基づく取意文か。高基は、『大宝積經』と推定して、説法に関する三種の吉祥瑞（梵音・妙香・光明）に類する表現を『大宝積經』から抽出するが判然としない（高基「付録」六丁左）。

59 勝心品とは、すぐれた心の状態。覚りを求める心、すなわち菩提心を発することである。

60 毘湿葉とは、「毒葉・毒物」を意味する梵語 *viṣa* の音写語か。甘露の妙薬に変ずるとしているが、それは毒同士の間和作用によるものか。あるいは『華嚴經』等に説かれる「毘芟摩葉」、すなわち毒の除去を意味する梵語 *viṣama* の音写語か。

61 師子の筋の論は、仏駄跋陀羅訳『大方広仏華嚴經』入法界品（『大正藏經』九卷七七八頁下段）等に説かれる。師子の筋を琴絃として演奏すると、それ以外の全ての絃が断絶するように、菩提心の筋をもって奏できれば、五欲・二乗の絃を断滅することができるという。

62 檀香の論について、檀とは梵語 *candana*（梅檀）の音写語で、芳しい香りを放つ樹とされる。一方の伊蘭とは梵語 *erāṇḍa* の音写語で、悪臭を放つ樹とされる。良い香りの梅檀樹は菩提に喩えられるのに対し、悪臭を放つ伊蘭樹は煩惱に喩えられる。

63 寶伽羅の論は、曇無讖訳『優婆塞戒經』(『大正藏經』二四卷一〇六三頁上段)に説かれる。『優婆塞戒經』によれば、寶伽羅 (Pigala か) とは迦陵国の住人で、三宝帰依の功德によつて無尽蔵の宝蔵を得たとされる。迦陵国とは、梵語 Kalinga の音写語で、インド中東部に存在した国名を指す。

64 『明了論』とは、弗陀多羅多造・真諦訳『律二十二明了論』(大正蔵一四六一番)と目されるが、耆婆の鼓の話を見いだすことができない。

65 師子の乳の論は、仏駄跋陀羅訳『大方広仏華嚴經』(『大正藏經』第九卷七七八頁下段)等に説かれる。牛・馬・羊の乳を集めたところに、一滴でも師子の乳を投ずれば、他の乳が消えてなくなるように、菩提心の乳を無量の業煩惱に投ずれば、みな全て消えつくし、声聞・縁覚に住さなくなるという。

66 功德の瓶の論は、龍樹造・鳩摩羅什訳『大智度論』に説かれる。『大智度論』では、常に天を供養すれば、徳瓶が得られ、意のままに所願が叶うとしているが、法華疏では供養対象を功德天、すなわち吉祥天(梵語 Śrīmatadevi)に限定している。

「譬如有人常供養天。其人貧窮一心供養滿十二歲求索富貴。天愍此人自現其身而問之曰。汝求何等。答言。我求富貴。欲令心之所願一切皆得。天与一器名曰徳瓶。而語之言。所須之物從此瓶出。其人得已応意所欲無所不得。得如意已具作好舍象馬車乘。七宝具足。」(『大正藏經』一五卷一五四頁上段)

67 水精の論は、護法造・玄奘訳『成唯識論』卷第六に説かれ、「如水清珠能清濁水」(『大正藏經』三一卷二九頁下段)とある。すなわち、善の心所の最初に信を挙げると、心の本性は澄清であることを、水精珠が濁水を清める様に喩えている。

68 真諦三蔵(四九九〜五六九)とは、四大訳家の一人に数えられるインド僧で、『俱舍釈論』『撰大乘論』『中辺分別論』『大乘起信論』等の大乘の経論を漢訳したことで知られる。

69 世親造・真諦訳『撰大乘論釈』の取意引用と考えられるが、謗の種類は五種ではなく四種であり、また文脈上、「如是」との関連性も見られない(『大正藏經』三二卷二四四頁上段)。

他方、古蔵撰『法華義疏』の本文と一致しており、孫引きの可能性も窺われる。

「真諦三藏云。如是者離五種謗故云如是。言五種謗者。一如言此經因果決定是有名增益謗。二如言此經因果決定是無名損減謗。三如言此經因果又有又無名相違謗。四如言此經因果非有無名愚痴謗。五如言此經因果非不有非不無名戲論謗。離此五種謗故名為如是也」(『大正藏經』三四卷四五頁中段)

70 毘沙門とは、梵語 Vaisravana の音写語であり、多聞天とも訳される。毘沙門天のルーツとして、古代インドの財福神クベラ (梵語 Kubera) があることから、「富貴如毘沙門」という。

71 親光等造・玄奘訳『仏地経論』(『大正藏經』二六卷二九一頁下段)の取意引用。「如是」に関する四義釈は、窺基の諸注釈(同三三卷二七頁下段、三四卷六六二頁下段)をはじめ、円測(同三三卷三六二頁下段)、法蔵(同三五卷二六頁下段)、良賁(同三三卷四三六頁中段)等の著作中に散見される。

72 梁武帝(五〇二〜五四九)とは、南朝梁を建国した初代皇帝であり、仏教を深く信仰したことから「皇帝菩薩」とも称された。
73 「梁武帝の云く」とあるが、直接の出典は不詳である。窺基の諸注釈にしばしば同様の表現が見られるが、その中でも『大般若波羅蜜多経般若理趣分述讚』の「梁武帝云。如是如斯之言。是仏所説。故言如是」(『大正藏經』三三卷二七頁中段)の表現が一致している。

74 静泰(生没年不詳)とは、唐代の僧で、『老子化胡経』をめぐり道士と論争したとされる。

75 「静泰法師の云く」とあるが、直接の出典は不詳である。『大般若波羅蜜多経般若理趣分述讚』に、「如即指法是即定詞」(『大正藏經』三三卷四三六頁中段)という類似表現があるが、その出典について静泰ではなく、「梁武帝云」と記している。

76 僧肇(三八四〜四一四)とは、後秦代の中国僧で、鳩摩羅什の有力な弟子として訳経を助けるとともに、『維摩経注』等を著した。

77 「肇法師の解に云く」という表現は、吉蔵・窺基・智顛・良賁等の諸注釈に散見されるが、その大元は、僧肇撰『注維摩詰経』の「如是 肇曰。如是信順辞。夫信則所言之理順。順則師資之道成」(『大正藏經』三八卷三八頁上段)と考えられる。

78 世親造・真諦訳『撰大乘論釈』(『大正藏經』三一卷二二頁下段)。

79 智積院所藏の高基本(版本一・八一四一)には、本文「嘉首」の傍らに「肴イ」、すなわち異本では「嘉肴」としている。また窺基の諸注釈には、しばしば「食法味之嘉手」(『大正藏經』三四卷六六二頁中段等)と表現されることから、能書・能書を意味する「嘉手」の可能性もある。

80 高基本、卍統藏本および大正藏の本文は、ともに「荷法宝於両肩」とするが、前後の文体から判断して、大正藏の注にしたがい「於」を「之」に改めた。

81 護法造・玄奘訳『成唯識論』(『大正藏經』三二卷二九頁中段) 卷第六に説かれる。冒頭の偈では、善の心所として、信・慚・愧・無貪・無瞋・無痴・勤・安・不放逸・行捨・不害の十一種を挙げ、最初の信について、実有を信ず、有徳を信ず、有能を信ずの三種を挙げ、それぞれの理由を明かしている。

〈キーワード〉法宗、大迦葉、『仏頂尊勝陀羅尼經教迹義記』、『周書異記』、信成就